

國學院大學學術情報リポジトリ

取り組みレポート TOEIC IP促進における課外英語学修支援の取り組み

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松岡, 弥生子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002114

TOEIC IP 促進における課外英語学修支援の取り組み

松岡 弥生子

【要 旨】

本稿は、國學院大學のTOEIC IPの推進における教育開発推進機構ランゲージ・ラーニング・センター（LLC）による英語学習の支援の取り組みを報告する。試験の準備講座の運営や英語学習素材の提供など全体または個人としての学習者への支援の仕組みを紹介し、前年度のTOEIC IP受験者数の推移やスコアの状況についても検証する。また後段では他大学におけるTOEICの導入事例を取り上げ、大学英語教育における英語能力検定試験の今後の活用を考察する。

【キーワード】

TOEIC TOEIC IP 英語学習支援 英語カリキュラム プレイスメント・テスト スコア分析

1. はじめに

Test of English for International Communication (TOEIC)⁽¹⁾は、米国ETS⁽²⁾によって開発され1979年の開始以来、英語によるコミュニケーション能力を評価する共通テストとして、日本の社会で広く利用されている。国内でTOEICの運営・配信を行う国際ビジネスコミュニケーション協会 (IIBC)⁽³⁾の調査によると、2014年度の日本におけるTOEIC受験者数は約240万人にのぼり、個人による受験のほかに 約3,400の企業・団体・学校等で採用されており、我が国の上場企業の実に約6割以上が入社試験でTOEICスコアを参考にするという。また、これらの企業が新入社員に求めるTOEICスコアは一般的に600点と言われ、海外との交渉を担当する部署の人材であれば730点程度を取得していることが望ましいとも言われる。TOEICは、企業では自己啓発や英語研修の効果測定、新入社員の英語能力測定、海外出張や駐在の基準、昇進・昇格の要件などとして利用される。こうした社会における普及率の高さが、TOEICが英語学習の一部として多くの高等教育機関で取り上げられる要因になっていると考えられる。教育機関では、TOEICは、レベルチェック、授業の効果測定、入試や英語課程の単位認定の要件として活用されている。実際、2015年にはIIBCが調査対象とした751の4年制大学のうち約半数の380大学でTOEICを入学試験に活用しており、367大学で単位認定に活用していることが報告されている。國學院大學では、1998年10月よりTOEICのInstitutional Program (IP)⁽⁴⁾試験を実施しており、その歴史は約18年に上る。開始当初から2014年度までは本学総合企画部エクステンション事業課が試験の実施を執り行って来たが、2014年度半ばより課外英語教育全般が教育開発推進機構ランゲージラーニング・センター（LLC）に一元化して移行された。

翌2015年度に教育開発推進機構事務課が新たに発足したことを機に、その年から同センターが試験実施業務を負うこととなった。同時に、同センターは、本学の英語教育を課外から支援することを目的とする教育組織という位置付けであるため、英語教育の一環としてTOEICの学習面の様々なサポートも行なう事となった。尚、TOEICは28年5月より出題形式が変更され、公式受験ではすでに新方式のテストが実施されているが、IPテストにおいては移行期間である28年度は既存の旧方式のテストを実施することができるため、本國學院大學でも年度いっぱい旧方式のTOEIC IPを実施する。そのため、LLCが提供するTOEIC学習支援も28年度中は旧方式を対象としている。グローバルな人材育成が高等教育機関の急務とされ、一定の英語力を持つ事がビジネス・スタンダード⁽⁵⁾として求められる今日の日本社会に在って、大学としてTOEIC受験を推進することは、1人でも多くの学生に公式評価のスコアを持たせ、その評価点を1点でも高いものにして実社会に送り出す結果に繋がることが期待できるため、多くの学生の将来に資すると考えられる。

本稿では、國學院大學教育開発推進機構ランゲージ・ラーニング・センターによるTOEIC IPの推進における、試験の準備講座の運営や英語学習素材の提供などTOEIC英語学習の支援の取り組みを報告し、昨年度の本学TOEIC IPに関する受験者数の推移やスコアの状況についても検証する。また他大学におけるTOEICの導入事例や取り組みを取り上げ、大学英語教育における英語能力検定試験の今後の活用を考察する。

2. LLCにおけるTOEIC学習の支援

本章では、LLCが平成27年度より28年度10月現在まで、TOEIC IPの受験推進と共に取り組んできたTOEIC準備学習の支援について報告する。図1は、28年度現在のLLCにおけるTOEIC学習支援の取り組みの概要を示している。その学習支援の方法は、①TOEIC学習講座、ワークショップ、模試など集団を対象とした活動の実施と、②学習者に適切な学習法や教材を提案する学習アドバイジング、学習の進捗や試験結果の自己管理のための補助素材の提供といった個別対応の活動という2つに大別される。集団的支援は主に、施設を持たない渋谷校舎で一般教室を使用して行なわれており、個別の支援は両キャンパスで行なわれている。前者は一定の期間だけ提供される期間限定的な学習の支援であり、後者は学習者が望めばほぼいつでも受けることの出来る恒常的な学習の支援である。LLCでは、この両方を組み合わせることによって、きめ細かく一人ひとりの学習者に寄り添うサポートを目指してきた。本章では、それらの具体的な取り組みを概説する。また、学習自体に対するこうした支援の他に、学習環境やプログラムの運営を支えるシステムの枠組みとして行なわれた様々な取り組みも短く紹介する。

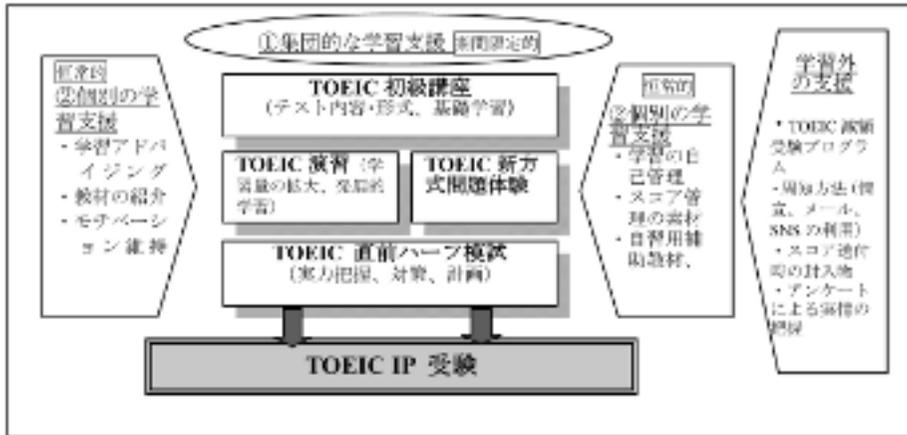


図1 LLCにおけるTOEIC学習支援の仕組み（平成28年度後期現在）

2.1 集団を対象とするTOEIC学習の支援

学習者への集団的な学習支援として、LLCでは、TOEIC初級講座、TOEIC演習、TOEIC新方式問題体験会、TOEIC直前ハーフ模試などを実施している。表1は、27年度から28年度にかけてLLCが実施した集団に向けた活動の概要である。尚、講座や模試等の集団的な活動は、LLCが学習スペースを持たない渋谷キャンパスをベースとする学部生への措置として、渋谷校舎でのみ開催されてきたが、28年度後期より、横浜たまプラザ校舎でも一部の講座を試験的に実施することとなった。

TOEIC初級講座

TOEIC初級講座は、TOEICの初級学習者およびテスト未経験者を対象としてTOEICの内容を分かりやすく説明し、比較的難易度の低い問題を抜粋して体験させ、自主的なテスト準備学習をスタートさせることを目的として27年度前期に開設された。当初は、大学に入学して初めてTOEICの学習を開始する1年生を主なターゲットとしていたが、その後、実際には、中級レベル以上の学生の参加も見られた。これは、日程・時限の都合、他の履修科目との関係、抽選に漏れた等の理由からアドバンスド・イングリッシュやその他の正課TOEICコースを履修できなかった学生、英語の単位取得を終了したため英語に触れる機会が希少になった学生、自分一人での英語学習のモチベーションの維持が困難になった学生などが含まれていた（学習相談データベースより）。新設時の27年度前期には、オンライン語学学習プログラムNetAcademy2を教材として利用する方式であったが、コンピューター室を利用した学習への馴染みの薄さや周知方法の問題などから参加者は限定的であった。27年後期からは、場所を一般教室に移し、教材も紙媒体に代えるなど受講のし易さの向上に努め、リスニング・セクションとリーディング・セクションに分けて毎回のクラス構成をおこなった。28年度に入り、リスニングとリーディングの各セクションを更に7つのパート別に分けた「パート別学習」として構成を見直し、パートごとの問題傾向などのより詳細な情報提供、学習ストラテジーの提案、それらを反映した問題

の提示などを含めた方法を導入した結果、学生への周知徹底に関する事務サイドの功績に後押しされたこともあり、受講者数は格段に増加した。28年度後期では、これに引き続き、受講者がより正確にTOEICの出題構成を理解し、其々のパートの問題に合った勉強法を修得することを目指した。課題としては、講座実施における時間数の確保、場所の問題などが挙げられる。

TOEIC直前ハーフ模試

TOEICのような検定テストの準備学習では、実際のテストの疑似体験をして本番に備えることが有効である。「TOEIC直前ハーフ模試」と名付けた本講座は、TOEICの本試験では200問を約2時間かけて解答するところを、半分量の100問に縮小したテストを約1時間で解答させるものである。60分でテストをおこない、残りの30分で解答を提示し、答え合わせは各自がおこなう。テスト問題は公式問題集からの抜粋を使用し、マークシート用紙も使って、本番さながらの状況で行なう。それにより、実際の問題を体験する事に加えて、時間配分の仕方、自己の精神状態のコントロールの仕方など、本番に向けた心構えをすることが可能になる。実際、講座後に記入して貰ったコメント・ペーパーでは、「この講座を受けたお陰で、本番でそれほど緊張せずに受験できた」という内容の記述が多数みられた。また、この講座では、その場で自己採点することから、学習者は、自分の弱点や間違い易い項目を認識し、おおよその得点を予測することも出来る。「TOEIC直前ハーフ模試」は、27年度後期に新設され、本テストの1、2週間前にほぼ毎回、実施された。「TOEIC初級講座」と併用することを奨励しているが、「TOEIC直前ハーフ模試」はより幅広い学力層の参加を促す為、学力レベルは設定していない。その結果、参加者には、次回の本試験の受験申し込み者と、現時点で受験予定のない者とが混在している。本講座は、28年度後期より、横浜たまプラーザキャンパスでも試験的に実施することとなった。

TOEIC演習

28年度に入って実施したアンケートで、TOEICの中級程度の学力の学習者に対応した講座を望む声があったことから、同年度後期より設置された。しかし、時間帯の都合により、ハーフ模試の行なわれない日程を利用し、学内行事等を避けた結果、年度内は2回の実施を余儀なくされた。「TOEIC初級講座」が出題傾向の説明を伴ったパート別学習であるのに対し、本演習講座は、主にテスト経験者を対象として各パートの説明を省き出来るだけ多くの問題に当たることを目的としている。

TOEIC新方式問題体験会

TOEICはETSにより、28年からその出題形式が大きく変更された。個人申し込みの公開テストでは本年5月よりすでに新方式のみが行なわれており、学内IPでも29年度より全面的に新方式に移行する事が決定されている。それを鑑みて、LLCでは、一連のTOEIC講座の最終日に新方式問題の説明を行い、実際に問題を解く体験会を実施してきた。

新方式の最も大きな変更点としては、リスニング・セクションのパート3に3名の登場人物

による会話やチャットが出題されることである。2名のやり取りが3名になることで会話はより複雑となる。更に、話し手の意図を問う問題、言い換えや言い淀みなど自然の会話コンテキストを反映した出題が増加するため、聞く一方の練習でなく声に出したリーディングやスピーキングなどを取り入れたより総合的な学習が必要になって来る。問題数も改定され、リスニング・セクションのパート1(写真描写)とパート2(応答問題)、リーディング・セクションのパート5(短文穴埋め)などの、初心者が比較的点数を稼ぎ易いとされた問題の数が減少し、反対に、

表1 LLCにおける平成27年および28年のTOEIC学習講座等の概要

	活動名	対象者	目的	内容	前学期からの改善等
27年度前期	TOEIC初級講座	TOEIC未受験	テスト構成を理解し問題を体験する。	コンピューター教室にて、オンライン教材NetAcademy2を使用し、問題を解き、答え合わせ、解説を実施。NetAcademy2学習登録を義務付ける。	新設
27年度後期	TOEIC初級講座	TOEIC未受験者とTOEIC初級学習者	テスト構成を理解し問題を体験する。	リスニング、リーディングのセクションごとの学習をおこなう。	普通教室で紙ベースの教材にて実施することで受講し易さの向上を図った。
	TOEIC直前ハーフ模試	参加レベル設定なし	本試験への準備をする	約半分量の問題を解き、答合わせを行なう。自身の現状や弱点を把握しおよそのスコアを予測する。時間の都合により解説は無い。	新設
28年度前期	TOEIC初級講座	TOEIC未受験者とTOEIC初級学習者	テスト構成を理解し問題を体験する。	7つのパート別に問題を学習し、ストラテジーを学ぶ。解答、答え合わせ、解説を実施。	パート毎に分け問題傾向把握と対策に焦点を当てた。頻出動詞リスト、自習用の追加教材を毎回、配布した。
	TOEIC新方式体験	参加レベル設定なし	TOEIC新方式テストを体験する	29年度学内IPからの主な変更点やパートを解説し問題を学習。	新設：29年度からの学内IPの新方式問題テスト移行に対応して新設した。
	TOEIC直前ハーフ模試	参加レベル設定なし	本試験への準備をする	約半分量の問題を解き、答合わせを行なう。自身の現状や弱点を把握しおよそのスコアを予測する。短い解説を含む。	限定的ながら短い解説を含むこととした。
28年度後期	TOEIC初級講座	TOEIC未受験者とTOEIC初級学習者	テスト構成を理解し問題を体験する。	7つのパート別に問題を学習し、ストラテジーを学ぶ。解答、答え合わせ、解説を実施。	前学期に引き続く。
	TOEIC演習	TOEIC初級・中級学習者	多くの問題に触れる。	リスニング、リーディング各セクションから抜粋した中程度の難易度の問題。解答、答え合わせ、解説を実施。	新設：学習者ニーズに対応し、多くの問題を解く機会を提供した。
	TOEIC新方式体験	参加レベル設定なし	TOEIC新方式テストを体験する	29年度学内IPからの主な変更点やパートを解説し問題を学習。	前学期に引き続く。
	TOEIC直前ハーフ模試	参加レベル設定なし	本試験への準備をする	約半分量の問題を解き、答合わせを行なう。自身の現状や弱点を把握しおよそのスコアを予測する。限定的ながら短い解説を含む。	前学期に引き続く。

リスニングのパート3（会話）やリーディングパート7（長文読解）など難易度の高い問題の数が増加した。29年度からは、新方式に留意した講座内容の見直しが必要である。

2.2 個別対応によるTOEIC学習支援

TOEICに取り組む学習者への個別サポートとして、LLCは学習アドバイジングの実施、学習履歴とスコアの自己管理のための“モチベーション・シート”の配布、学習方法ガイドラインの作成などを、渋谷とたまプラーザの両キャンパスで行なってきた。

学習アドバイジング

学習相談または学習アドバイジングと呼ばれるセッションは“教員が学生1人に対して個別に行なう人と人との相互行為に基づいた教育の手段であり、学修の結果よりも課程に重きを置く”（Gremmo, 2011, p.151: 池田智子訳）と定義されるように、個別学習支援の中核を成す取り組みである。LLCでは、26年度10月の創設当時から「外国語学修相談」という名称で予約システムに基づいて様々な問題に個別に対応してきた。そこで取り上げられる相談のトピックの中、TOEICに関するものは27年度には渋谷とたまプラーザの両校地合わせて全体の約22パーセントであった。しかし、28年度からは「アドバイジング」としてその範囲を広げ、教員と学生間の短いやり取りや予約無しの質問なども含めて記録してみると、28年度前期では、約290件のアドバイジングのうち、第一義的にTOEICに関するものが67件、二義的にTOEICに関わるものが14件、合わせて81件（全体の28パーセント）あった。TOEICに関する相談は、本人の現在のスコアや勉強法などの情報に基づき、次で述べるモチベーション・シートや学習ガイドラインを活用してアドバイスを行っている。又、TOEIC未受験者や自分の問題点が把握できていない相談者には、実際に問題を解いて貰いそれを添削してから再度セッションをおこなうなどの措置を実施している。

モチベーション・シート

LLCのようなセルフ・アクセス型の学習施設・組織の存在目的は、自立した学習者の育成である。単位や卒業要件を満たすことを目的にTOEICを一度は受験したものの、その後は放置したままという事態を防ぎ、学習のモチベーションを維持するために、学習自己管理ツールとして開発したのがモチベーション・シートである。シートは記入式で、①TOEICセルフチェック（TOEICへの自分の理解度を記入）、②TOEIC受験計画と履歴（L:リスニング/R:リーディング別のスコア）、③TOEICの学習に関する短期の記録（学修相談でのアドバイスや講座への参加履歴、使用中や購入予定の教材、月別や週別の自分のプランなど）、そして④年間の学習予定表（学内IPの日程、年度内の目標スコア、一定時期までにやり遂げたい事柄など）という4項目で構成される。学生はここに自分で必要事項を記入をすることで、自らの学習を管理し、次のステップへの足掛かりとする。シートは、TOEIC講座やハーフ模試の現場で配られ、LLC YOKOHAMA OFFICEのフロン

トデスクにも置かれている。他の課題シート等と大きく違う点は、学習者本人の自己管理を目的とするため、特に提出は義務付けられておらず、学習相談等で利用する他は、本人の保管とする点である。

TOEIC 学習ガイドライン、頻出語句一覧表、その他の教材

TOEIC 講座や学修相談では「TOEIC の勉強の仕方がわからない」「何から手をつけたらよいのか教えて欲しい」という質問をよく耳にする。このような学習者に対応して、LLC では TOEIC 学習方法の手引きとなる印刷物を用意している。内容は、①ボキャブラリ・ビルディング（TOEIC のどのレベルの学習者にとってもスコア・アップのキーアイテムとなる語彙の学習についてのまとめ）、②リスニング・ストラテジー（リスニング力の向上に向けた方略）、③リーディング・ストラテジー（基本的な読み方やリーディング・セクションの攻略法について）、④LLC で受けられるサポート情報（TOEIC 講座や TOEIC アドバイジングなど）の 4 つの項目で構成されており、TOEIC 学修相談の折などに配布している。市販の TOEIC 教材や書籍も渋谷とたまプラーザ両キャンパスで、公式問題集を中心に基本的なものを揃えているほか、TOEIC の頻出動詞を一覧表にして自習が出来るようにした手作りのプリントを講座で配布している。

2.3 学習以外の支援の取り組み

以上、本章では、TOEIC の学習支援に関して LLC が実施してきた様々な学習の取り組みを報告したが、その他に、そうした学習を支える“外側の枠組み”とでも言うべき支援の取り組みがある。この学習外の支援では、28年度半ばの TOEIC 減額受験プログラムが最も大きい取り組みである。大学の助成による減額受験のプログラムは 2 種類から成る。それらの一つ「TOEIC スコア・アップ支援」では、5 月または 7 月の TOEIC IP 受験者が再度 29 年 2 月のテストを受験する場合に受験料を 1,000 円に減額する（通常は 3,500 円）。もう一つの「TOEIC 初回受験支援」では、初めて TOEIC を受験する学生を対象に 9 月の TOEIC IP 受験料を 1,000 円（通常は 3,500 円）に減額することで 1 人でも多くの学生に受験を促すというものであった。本稿は「学習そのものに関する取り組み」を取り上げる事を目的とする為、これについては概要説明に留めることにする。そのほか、スコア送付時にモチベーション・シートや学習ガイド等を封入することで受験者に学習の継続を促す、TOEIC 関連の講座やその他の有益な情報を E メールや SNS 等を利用して学習者にタイムリーに配信する、国際交流課や広報課をはじめ他部署との連携、連絡など、事務サイドのきめ細かく地道な努力が TOEIC 学習支援の枠組みを支えてくれている事を付け加えておく。

3. 國學院大學 TOEIC IP における最近の受験者数、スコアの変化等

ここまで LLC による TOEIC 推進の様々な取り組みを述べたが、実際にはどのくらいの

数の学生がTOEIC IPを受験し、どのような成績を取めたのであろうか。本章では、國學院大學においてLLCが初めてTOEIC IPの受験と教育を担当する事となった平成27年度について、1年間の受験者数の推移、スコアの変化や分布の状況を検証する。

3.1 受験者数と平均スコア

平成27年度内には、5月から翌年の平成28年2月まで、計6回のTOEIC IP試験が実施された。表2は、國學院大學27年度のTOEIC IPにおける毎回の受験者数、スコアの平均値、最小値と最大値、最頻値、標準偏差など基本的な情報のまとめである。まず、受験者数の推移を見てみる。図2は27年度TOEIC IPにおける受験者の延べ人数を示す。これによると、年間合計延べ受験者数は1,238人であった。毎回の受験者数は最低175人から最高250人の間で増減しており、平均して各回約206人が受験したことになる。年度の初回と比べると最終の第6回では41人の増加が見られることから、TOEIC IP受験に対する関心は上向いてきたと思える。第2回には平均値を下回る178人、第5回には年度最低となる175人の受験者数しか得られていないが、毎回の受験者数は、学内行事、休暇、試験、受験者本人の都合など様々な要因の影響が想定されるため、回によって受験者数が増減することは避けられないと考える。図3は27年度TOEIC IPにおける毎回のテストのスコア平均値の推移を示す。これによると、この1年間、毎回のスコア平均値は最低448点から最高475点の間で推移しており、そこから割り出した年間の平均値は約462点であった。全体を通しての最低値は180点で第2回と第4回に、最高値は870点で最終の第6回に観測されている。第5回と第6回の平均値は同じ471であるが、第6回では最高値と最低値との間に大きな開きが見られる。一方、第5回では、最高値と最低値の差は第6回よりも小さいが、標準偏差が131と一番高いことからスコアのばらつきが大きかったことが伺え、グラフからもやや正規性が低いことがわかる。

これら受験者数と平均値の2つのグラフを見比べると、受験者数が比較的に高い第1回(208人)、第3回(209人)、第4回(218人)、第6回(250人)ではスコア平均値も其々、475、457、452、471とやや高めとなっている一方、第2回と第5回では受験者数は同数に近いにも関わらず平均スコアには約23の開きがある。受験者数と平均スコアの間をピアソン相関係数により求めると $r=0.242$ 、 $(0 < r < 1.0)$ となり正の相関がみられるものの、非常に弱いことが分かる。つまり、受験者数と点数は多少は関係するかもしれないが、当然ながら、受験者数を増やすだけではスコア平均値の伸びを期待することはできない。一人でも多くの学生にスコアを持たせる事と、そのスコアをアップさせることはどちらも重要であり、別個に取り組んで行く必要がある。

3.2 スコアの分布

次に、各回のテストにおける点数の分布状況を見る。表3は、國學院大學における平成27年度TOEIC IPの毎回のスコアの分布状況を、点数区間100ごとに表したものである。また、

それをヒストグラムで表したものが図4である。図4-1から4-6のグラフの形状を見ると、全てが中央付近の高い山形を示している。またこれらのデータを元に6回のIPテストのスコアの相対累積度数を折れ線グラフで表して重ねてみると、図5のように6本のローレンツ曲線がほぼ重なって緩やかなS字を描く。これらの事から、どの回もスコアは、中間層が多数を占め両極が少ない正規分布に近い形で散らばっていると言える。点数区間について見ると、人数のピークが300点台に来る第5回を除いた全ての回で点数区間4（スコア401-500）に一番多くのスコアが集中していることが分る。其々の回の平均値もこの範囲に在る。次いで、2番目に多くのスコアが、近接する区間3（301-400）に、3番目に多くのスコアが区間5（501-600）に集まっている。また図4の其々のグラフの近似曲線を見ると、やや左側が高くなっており、中央より低い点数区間により多くのスコアが集中し、高い点数区間にあるスコア件数の方が少ない状況を示している。ここから、いくつかの課題が浮かび上がる。まず、区間3、4、5のいわゆる中間層の受験者については、300点台のものを400点台に、400点台のものを500点台に引き上げる方策が必要である。600点以上の言わば上位層の割合は、全体の中で10から18パーセントを占めているが、この部分の学習者数を更に増やすことが望まれる。特に、全体のスコア・レベルを引き上げるための牽引役ともなる800点以上のスコア層が非常に少なく、900点以上が年間を通して皆無である点も、早急に対応していく必用がある。反対に、300点に届かない区間1と2の学習者は英語の学習方法や動機付けに大きな問題を抱えている可能性が高いので、個別アドバイジングなどのサポートが必要であろう。

表2 國學院大學における27年度TOEIC IPの毎回のテストの基本情報

	第1回 (5月)	第2回 (7月)	第3回 (10月)	第4回 (12月)	第5回 (1月)	第6回 (2月)
受験者数	208	178	209	218	175	250
平均値	475	448	457	452	471	471
最小値	220	180	225	180	215	190
最大値	840	810	815	825	835	870
標準偏差	121	117	110	117	131	127

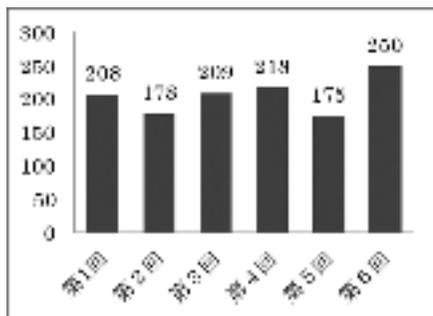


図2 國學院大學27年度TOEIC IPにおける受験者数の推移

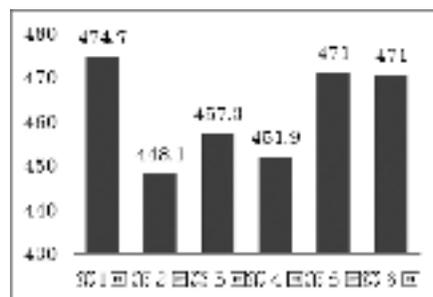
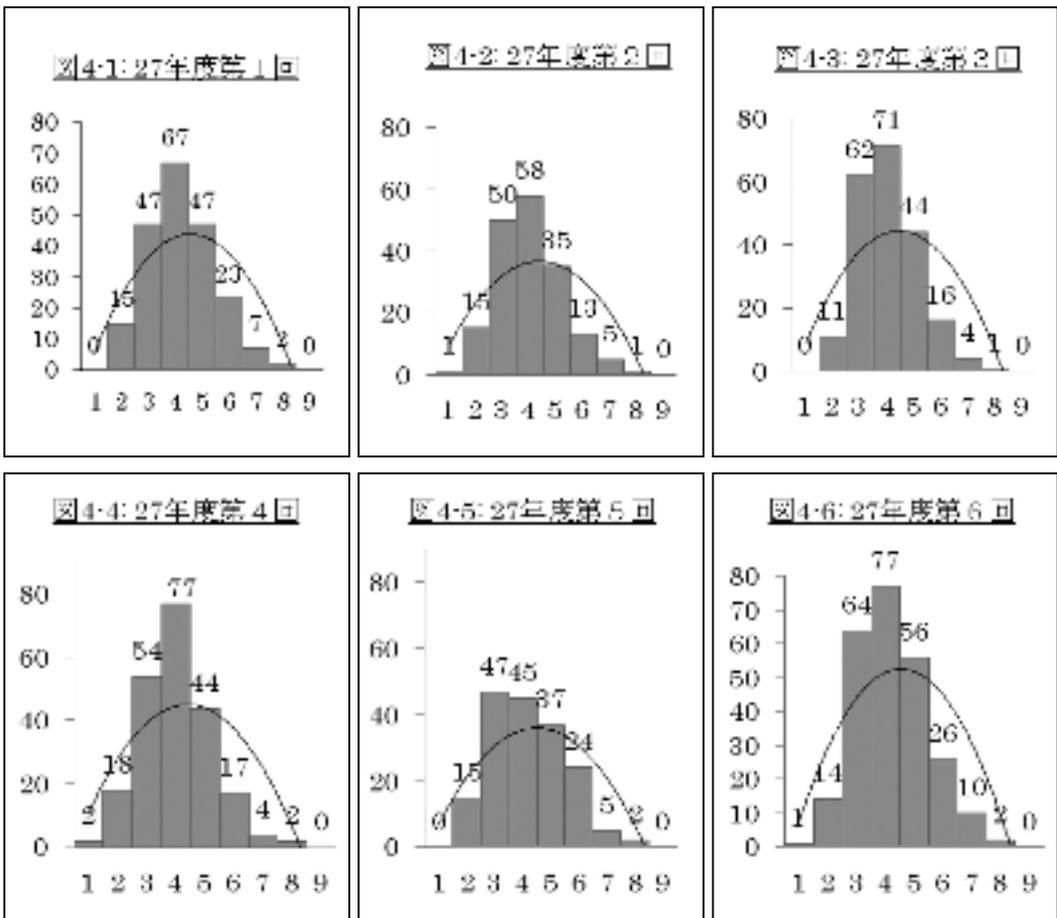


図3 國學院大學27年度TOEIC IPにおけるスコア平均値の推移

表3 國學院大學における平成27年度TOEIC IP各回のスコア分布状況

	点数区間	人数					
		第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回
1	101-200	0	1	0	2	0	1
2	201-300	15	15	11	18	15	14
3	301-400	47	50	62	54	47	64
4	401-500	67	58	71	77	45	77
5	501-600	47	35	44	44	37	56
6	601-700	23	13	16	17	24	26
7	701-800	7	5	4	4	5	10
8	801-900	2	1	1	2	2	2
9	901-990	0	0	0	0	0	0



縦軸[人数] 横軸[点数区間 1:101-200, 2:201-300, 3:301-400, 4:401-500, 5:501-600, 6:601-700, 7:701-800, 8:801-900, 9:901-990]

図4 國學院大學における平成27年度TOEIC IP各回のスコアの度数分布(人数)

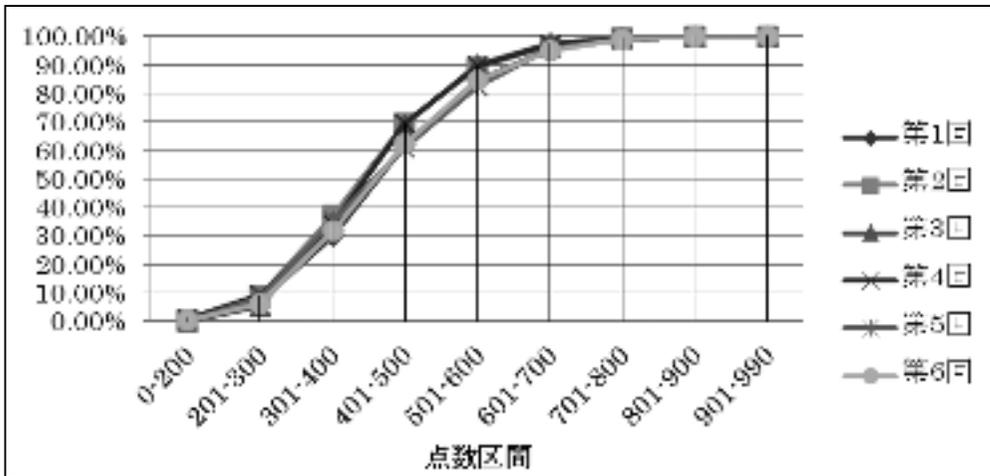


図5 6回のTOEIC IPにおけるスコアの相対累積度数曲線

3.3 個人のスコア変化の状況

次に、学生個人レベルのスコアの伸びはどの様であったかを検証する。表4および図6は、当該期間における総受験者実数（個人数）とその受験回数の内訳である。これによると、期間内のTOEIC IPの総受験者の実数は863名であったが、その約67パーセントに当たる577人が1回のみしか受験をしておらず、期間内に2回以上受験した「複数回受験者」は残りの33パーセント（286人）であった。この286人を対象とし、各受験者の初回受験時のスコアと2回目以降の期間内のベストスコアとの関係を調べた。図7はその結果をまとめたものである。それによると、初回受験時のスコアと比べて期間内にスコア上昇が認められたものは約62パーセント（177人）、期間内に初回と比べてスコアが下降してしまったものが約36パーセント（102人）、スコアに変化が無かったものが2パーセント（7人）という結果であった。更に、この複数回受験者286人中のうち、22名がLLCのTOEIC関連講座等に参加していた事が分った（表5参照）。分析の結果、そのうち15人が平均で62.8点ほどスコアを上昇させており、6人が平均32.5点ほどスコアを下げ、1名がスコア変化無しという結果であった。しかし、これだけのデータではLLCのTOEIC講座が点数の上がり下がりに関係していたとは言えず、今後も引き続き調査が必要である。

表4 27年度TOEIC IP受験者実数と受験回数

1回のみ受験者の数	577		
複数回受験者の数	286	スコア上昇	177
		スコア下降	102
		スコア変化なし	7
受験者実数の計	863		

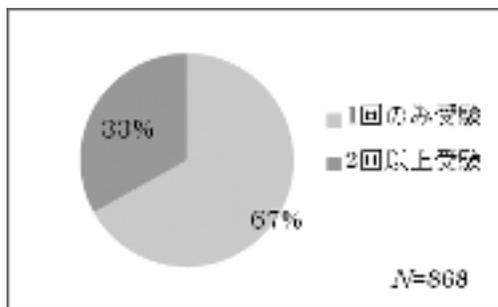


図6 国学院大学における平成27年5月から28年2月までのTOEIC IPの受験者数と受験回数の割合

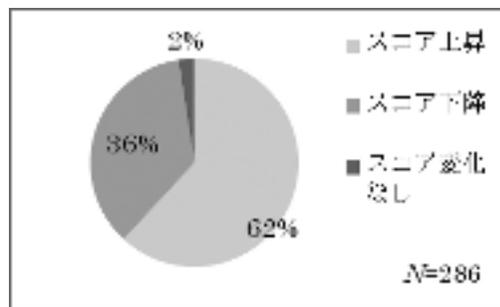


図7 国学院大学TOEIC IPにおける平成27年5月から28年2月までの複数回受験者のスコア変化

表5 複数回受験者中のLLC TOEIC講座等の参加者数とスコアの変化

変化	LLC 講座等参加者数 (人)	スコア変化の平均
スコア上昇	15	+62.8
スコア下降	6	-32.5
スコア変化なし	1	0
計	22	

4. 他大学におけるTOEICの活用事例

ここまで国学院大学の中のTOEICの状況やスコアの変化を述べてきたが、最後に、今後の参考とするため、他大学におけるTOEICの英語学習への活用の取り組みにも目を向ける。ここで取り上げるのは、早稲田大学商学部および群馬県立女子大学国際コミュニケーション学部の事例⁽⁶⁾である。

4.1 早稲田大学商学部におけるTOEICの活用

早稲田大学商学部における2014年度の商学部英語カリキュラムでは、新入生はまず入学前学力判断試験としてのWeTEC 7受験を完了した後、1年次では習熟度別の総合英語Ⅰ(必修)および選択英語、2年次で習熟度別の英語Ⅱライティング(必修)および習熟度別の選択英語科目、そして3年次以降では各種選択英語科目(四技能別および、コンポジション、プレゼンテーション、ニゴシエーション等)を履修できる。その間、1年次から毎年TOEIC IPを受験することになっており、一部の科目ではTOEIC IP受験が単位取得の一要件となっている。このように早稲田大学商学部ではTOEIC受験が強く推奨されているのだが、注目すべきは、TOEICの“対策ではなくその活用”に既に焦点が当てられているという点である。このために当学部は①テスト本来の目的とその活用、②学生の気付きと自主性を促す仕掛け、③使う場の創出と必要性、という3つのキーワードを用い

て方策を打ち出している。

①テスト本来の目的とその活用

テスト本来の目的に立ち戻ってその活用を行なうという方針に則し、TOEIC L & R IP テストは、英語学習の成果の測定および英語の総合力の測定という目的のための英語統一試験という位置づけとされている。本来、テストは学習効果の測定ツールであるのだが、それ自体を目的として限定的な知識やスキルの修得を目指した場合、無意味な学習になってしまったり、授業で必要な学習との間に矛盾が生じたり、という事態もあり得る。“テスト対策自体を目的としない”ことでカリキュラムへのマイナスのウォッシュバック効果⁽⁸⁾ (Bachman & Palmer, 1996) を排除しようという狙いであろう。また、TOEICは習熟度別英語クラスのプレースメント・テストとして使用されており、習熟度によるクラス編成への信頼性を高めることを目的としている。TOEICは、「常に1番と1000番がいる」テストであるから、そうしたスコアの並びの中で各受験者が具体的な順位を確認し自身の伸びを実感するのに適した測定媒体といえる。

②学生の気付きと自主性を促す仕掛け

教える側としては、TOEICの使用によって学生の“気付きとやる気”を引き出すことを期待している。しかし、テストだけ、あるいは授業だけでは“気付き”には至りにくく、学生の気付きと自主性を促すための仕掛けが必要になってくる。大学英語教育の方向性として、当学部では学生の“受動的学習”をいかに“能動的学習”に移行させるかという事に着目している。学生が自らの課題と方向性に気付く事がなければ、英語力の伸びは期待出来ないため、自主性を持たせ、より主体的な学習を可能にするため、Active Learning の取り組みが行なわれている。例えば必修のActive Readingのコースでは、予習・授業内作業・復習に分けてタスクやモデル文をLMS⁽⁹⁾上に投稿するAutonomous Learning in Process Writingという授業で練習エッセイを書かせるなど多様な取り組みがなされている。更に、TOEIC S & W (speaking & writing) テストも積極的に導入されており、将来の自分の仕事において何らかの英語使用を意識している多くの商学部の学生にとっては、英語学習の良い動機付けとなっているようである。

③使う場の創出と必要性

TOEIC S & Wが測定対象とする、話す・書くという能動的な英語力を伸ばすため、当学部では英語を使う場の創出にも留意している。学ぶ場と使う場をバランスよく配備することを念頭に、学内の国際コミュニティ・センター (ICC) では留学生との交流や学外でのキャンプ等を通じて英会話力を磨く事が出来る。早稲田大学では、英語によって多くの授業が提供されているため留学生数の大きな増加が見られるが、それに伴って、日本人学生の英語使用の機会も増すことになる。

4.2 群馬県立女子大学国際コミュニケーション学部における主体的学びを引き出すためのTOEICプログラムの活用

群馬県立女子大学国際コミュニケーション学部は、高度な英語教育、盛んな海外留学プログラム、学生の英語学習への高いモチベーション等を背景とする。2005年に開設された当学部は「実践的な英語力、高度なコミュニケーション力、国際社会で自立して活躍するための知識とリーダーシップを備えた人材の育成」を目標に掲げ、1学年定員60名という選りすぐった少人数制教育を実施している。TOEIC受験も当然ながら推進されている。2006年からは学部学生全員が卒業時まで730点以上を取得する事を目指しており、2014年には学年平均値800点を目指すことが示された。2013年から2015年まで過去3年間の当学部の「卒業生のTOEICベストスコアの平均点の変遷」⁽¹⁰⁾を見ると、入学時に既に平均値478.3であったものが、4年後期には更に734.6まで押し上げられている。これは、4年間の大学教育で学生のTOEIC平均値を約256ポイント向上させたことになる。因みに、学年ごとのスコア平均目標は、1年で660点、2年で730点、3年で790点、4年で800点である。

当学部の1年次・2年次の英語カリキュラムは、文法や発音の教育も重視されており、英語の話す・聴く・読む・書く、を其々単独で学べるコア・コース群をバランスよく設置している。またメタ言語知識として言葉を分析的に見る科目「英語のしくみ」や、高度なリーディング、ビジネス英語といった上級英語や実務英語も選抜式でこの時期に修得できることは、学力上位者層の育成に大きく資すると見られる。3年次以降では、上級コア・コース群の中でも言語産出力の向上に重きが置かれ、上級ディベート、ディスカッション、プレゼンテーション、上級ライティングなどを学ぶ事ができる。更に、「上級スキル」群として、フォーマルな英語（ニュースなど）、会話体の英語（ドラマなど）、観光英語やビジネスコミュニケーション、翻訳など様々な実践的プログラムが3,4年次に提供される。

こうした充実した英語カリキュラムの中で、TOEICプログラムは1年次から用意され、学生にとっては英語学習の動機付け、学生自身の英語力のモニターや目標管理という役割を果たしている。TOEICはプレイスメントとして活用され、TOEICプログラムの成績に基いた習熟度別のクラス編成が施行されている。この群馬県立女子大学国際コミュニケーション学部のように、その専門分野の学習と英語学習のモチベーションが合致する状況においては、成績の伸びを反映したクラスレベルで学ぶことが、学生のやる気を引き出していると考えられる。TOEICスコア・アップのための授業も用意され、CALL教室でリスニングを含めた自習ができるなど、手厚いTOEIC学習が用意されている。

一方、学部側にとっては、TOEICは学部としての学生の英語力のモニターやカリキュラム見直しに活用されている。例えば、3年生、4年生でTOEIC L & Rのスコアの伸びが小さくなる事や、リスニングのスコアに比べてリーディングのスコアが低いことなどがモニタリングから判明したため、2016年の現3年生より、英字新聞で英語を学ぶCurrent News Issuesのコースを3年生の必修科目として開設するなどの、見直しが行なわれた。

TOEIC S & Wについても、前述の早稲田大学商学部と同様、当該学部でも導入が進ん

でいる。目標スコアも明示されており、卒業までに、学年平均をスピーキング150点、ライティング170点、更に学生全員がスピーキング130点、ライティング150点の取得を目指している（各セクションの満点は200点）。また、TOEIC スコア・ポートフォリオおよび TOEIC S & Wスコア・ポートフォリオの二つを使用してスコアの記録を残し、学生が自分自身の英語力をいつでもモニターしたり、自分で目標管理を行なったり出来るように支援している。S & Wの準備コースも2016年後半から開始され、授業科目での学習とその結果指標としてのTOEICの活用が、入念に組み合わされている。

5. まとめと今後の課題

これまで述べたように、TOEICは英語学修プロセスにおける学習成果の確認ツールとして意義のあるテストである。しかし、前述の2大学の事例からも学び取れるように、こうした言語能力測定テストは、外国語学習の“目的”とは成りえず、数値によって学習効果の視覚化を実現することで学習者の勉強への動機付けに繋げていくような、効果的な“活用”の仕方を考えることが重要である（e.g., Bingham, 2016）。TOEIC L & R はあくまでも英語の読む・聴くという受動的技能（perceptive/passive skill）のみに特化した試験であることを忘れてはならない。言語の習得には読む・聴く・話す・書くという四技能すべてが関係するがTOEIC L & Rはそのごく一部を測定しているに過ぎず、総合的な英語習得を叶える為には残り二つの「話す・書く」スキル獲得への取り組みが必要となる。

今後の課題としては、学習者の英語運用における能動的技能（productive/active skill）を向上させる方策とその指標としてのTOEIC S & W（Speaking & Writing）テストの導入も検討が望まれる。S & Wのテストは、L & Rと比べて学習方法や教材が未だ十分に普及しておらず、費用も高額であることから、受験へのハードルは高い。しかし、真に英語コミュニケーション力を育成しようとするなら、能動的な英語の運用能力を高める必要があり、その評価テストの受験機会も必用になる。また留学の促進も視野に入れると、TOEFLなど、より世界基準レベルのテストの情報や受験機会の提供、関連した講座やワークショップの設置なども合わせて推進していくことが学習者の利益に資する。外国語の習得には、教授方法を始めとして、学習者の個人的要因（素質、嗜好、自信、動機付けなど）、学習のメカニズム（学習スタイル、方略、学習時期など）、言語学的要因（言語習得の理論、言語自体の問題など）、社会文化的要因（文化、風習、国や社会の言語政策）など実に様々な要因が関係しており（e.g., Acton, 1979; Bachman, 1990; Bandura & Walters, 1963; Brown, 2007; O' Malley & Chamot, 1990）、高等教育において英語の学習を提供する側はこれらを十分に理解した上で制度や仕組みを設計しなければならない。また外国語の能力は知識の投入と試用の機会とが揃う事で初めて習得されるが（松岡、2015）、その両方を提供できるLLCの様な自主参加型の学習施設では、学習者が英語を、教室内だけで学ぶ“外国語”を越えて実際に使用できる“第二言語”として効果的に修得するための

方策が必要であり、英語力検定試験もそうした広い視野のもとで促進していくことが望まれる。

注

- (1) 英語のコミュニケーション能力を聴く・読むという両面から測定するための外国語能力検定テストである。テストはTOEIC L & R (リスニング&リーディング)とTOEIC S & W (スピーキング&ライティング)の2種類に大別され、単にTOEICと言えば通常は前者を指す。TOEICの結果は合格・不合格ではなく、リスニングセクション5点~495点、リーディングセクション5点~495点、トータル10点から990点のスコアで評価される。評価の基準は常に一定に保たれる。TOEIC S & Wは、英語の話す・書く能力を測るテストで、専用パソコンを使用して受験し、スコア範囲は0点から400点(スピーキング200点・ライティング200点)である。TOEIC L & R、TOEIC S & Wに難易度の低いTOEIC Bridgeを加え、総称してTOEIC Programと呼ぶ。(出典：IIBC TOEIC <http://www.toeic.or.jp/>)
- (2) Educational Testing Service 180か国以上に展開する世界最大の教育テスト開発の機関。TOEFL,TOEICを始めとするアセスメント試験の開発、実施、評点、教育面での研究・分析・方針の研究、教員の認定などを幅広く行う。(出典：ETS: https://www.ets.org/jp/about/fast_facts)
- (3) The Institute for International Business Communication (一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会) TOEICに関する事業、出版・教育、調査・研究、情報提供、人材開発等を行なう。(出典：IIBC TOEIC <http://www.toeic.or.jp/>)
- (4) TOEICの団体特別受験制度。IPテストは企業では英語研修の効果測定や新入社員の英語能力測定、海外出張や駐在の基準、昇進昇格の要件など、学校では単位認定、プレイメント、留学前後の測定などに幅広く活用される。(出典：IIBC TOEIC <http://www.toeic.or.jp/>)
- (5) 日本社会や関連アジア諸国のグローバル化と国際的言語としての英語の使用、教育についての参考文献：Chun, P.H. & Koon, T.S., 2014；小坂, 2011；Nakayama et al., 2013
- (6) 本章の内容は、2016年8月に開催されたIIBC主催のTOEICセミナーにおける森田彰教授と鈴木利彦教授(早稲田大学商学部)および細井洋伸教授(群馬県立女子大学)のプレゼンテーション、本著者との談話、大学ホームページを参考にしている。
- (7) Web-based Test for English Communication インターネット利用の英語コミュニケーション能力判定テスト。個人の能力に合わせて出題が変化する適応型システムを採用し、60分という短時間で終了した後は即結果も表示されるため、手軽に実力のチェックが可能である。(出典：WeTEC受験ガイド <http://www.dept.edu.waseda.ac.jp/eng/2014%20WeTEC%20guide.pdf#search='WeTEC'>)
- (8) washback effect (backwash) 英語教授法において、テストの内容や準備学習などがその後の学習に与える良い又は悪い影響や効果を指す。
- (9) Learning Management System 学習管理システム。授業や学習を総合的に管理するためのオンライン学習プラットフォーム。ウェブ上での出席管理、課題提出、タスクの保存、学生ポートフォリオ作成などを可能にし、資料の事前・事後アップロードにより反転授業のツール、掲示板機能を用いて双方向コミュニケーションなどに利用されている。
- (10) 2013年度卒業生、2014年度卒業生、2015年度卒業生 それぞれの入学時と卒業時のベストスコア平均値の変化から、3年間の平均を求めたもの。

参考文献

- Acton, W. (1979). *Second language learning and perception of difference in attitude*. Unpublished doctoral dissertation, University of Michigan.
- Bachman, L. (1990). *Fundamental considerations in language testing*. New York: Oxford

- University Press.
- Bachman, L. & Palmer, A. (1996). *Language testing in practice*. Oxford: Oxford University Press.
- Bandura, A. & Walters, R. (1963). *Social learning and personal development*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Bingham, S. E. (2016). Development, implementation, and assessment of a TOEIC preparation course. *Bulletin of Miyazaki Municipal University Faculty of Humanities* 23 (1), 79-95.
- Brown, H. D. (2007). *Principles of language learning and teaching*. New York: Pearson Education.
- Chun, P.H. & Koon, T.S. (2014). Globalization and the teaching and learning of English in Malaysia. *Developmental Education*, 9 (1), 21-29.
- グレンモ, M. J. (2011). 「言語学習のためのアドバイジング (学習者オートミー、第5章)」
青木直子、中田賀之編：ひつじ書房.
- 国際ビジネスコミュニケーション協会 (2016) TOEICテスト2015：入学試験・単位認定における活用状況. 一般財団法人iIBC.
- 小坂 貴志 (2011). 「英語ビジネスコミュニケーションの新パラダイム：グローバル日本企業の社内英語化方針に関する論議の分析と一考察」国際社会研究 2, 15-39.
- 松岡 弥生子 (2015). 「大学の英語教育における課外学修活動の意義と展望」(大久保佳子・松岡 弥生子・佐川繭子 (2015) 「ランゲージ・ラーニング・センター開設のコンセプト」第二章) 國學院大學教育開発推進機構紀要第6号、p.5-9.
- Nakayama, T., Pek, H.C., Tan, S.K., Taguchi, S. & Fukushima, K. (2013). English as an international language: Study abroad in a multilingual society. *Josai International Review*, 18, 62-85
- O'Malley, J. & Chamot, A. (1990). *Learning strategies in second language acquisition*. New York: Cambridge University Press.

Developing Extracurricular English Learning Projects for the TOEIC IP Program

MATSUOKA Yaoko

Abstract : This paper reports on an extracurricular English learning project for TOEIC Institutional Program (IP) implemented at Language Learning Center (LLC) of the Institute for the Advancement of Teaching and Learning (IATL), Kokugakuin University. The report first introduces a variety of activities aiming to support the study of TOEIC English at LLC. These activities include group-based projects such as TOEIC preparatory courses and individual-focused support such as student advising. The paper then analyses the score results of TOEIC IP conducted at LLC in 2015 academic year, and examines other institutions' attempts of applying TOEIC IP in department-wide English curricula effectively. The conclusion discusses further improvement and effective application of proficiency tests in English education at higher educational institutions.

Keywords : TOEIC ; TOEIC IP ; English study support ; English curriculum ; placement test ; score analysis